

# 少年劇団の活動再開と John Marston

## —— 法学院劇としての *Histriomastix*

佐 野 隆 弥

### 1. Introduction

演劇史的見地から見たとき、広義のエリザベス朝商業演劇の生成・発展にインパクトを与えたファクターには様々なものが存在するが、そうした要因の中でも、少年劇団と商業演劇とのインターフェイスは、取り分け重要なものの一つと考えられる。

少年劇団そのものの存在活動履歴は、中世以来の長い歴史を持つものだが、エリザベス朝商業演劇との関連にのみターゲットを絞って考察すれば、George Peeleや John Lyly など、大学才人の初期の活動における少年劇団との接触と、*Hamlet* 2 幕 2 場、“little eyases”（「鷹の雛」）のフレーズを含むやり取りにおいて活写される、世紀の変わり目前後の時期における、いわゆる“Poetomachia”（「詩人戦争」）という物語で語られる事象とが、二つの重要な項目として知られている。

前者の接触状況とその効果について、著者は、ケニルワース・エンターテインメントや Peele の *The Arraignment of Paris*、また Lyly の *Campaspe* および *Midas* を対象に分析を行い、成果を発表してきた。そしてそれらを受けて、後者の現象を解明するための新たなプロジェクトの第一弾として、*Histriomastix* という戯曲の制作に関する分析を本論において展開する。

ただし、注意しておきたいのは、本研究が構想していることは、ただ単に詩人戦争をたどり直すことではないということである。世紀転換期の王朝交替期に勃興してきた諷刺文化を視野に入れながら、なぜこの時期に少年劇団が活動再開を果たすことが可能になったのか——詩人戦争に関連する戯曲を中心に、多層的な言説や環境を調査することを通して、その原因・理由なり要因を解き明かすことこそが本プロジェクトの最大のミッションであり、*Histriomastix* 分析によるデータ収集がその第一歩となる。本研究が活動再開のファクターに注目する理由——それは、詩人戦争を主題とする先行研究は数多く存在するもの

の、著者の知る限りこの問題に明確な記述を与えているものは、Michael Shapiroの少年劇団に関する文献だけだからである。Shapiroが提示する解答“profit”（利益・利潤）は、しかしながら、十分な敷衍もなければ、世紀転換期という時期についての必然性もなく、説得性の点で問題が残る。<sup>1</sup>この課題の追求には、少年劇団を活動停止に追いやった原因の延長線上に、活動再開を可能にした条件を探求する必要がある——という仮説を設定することが重要である。

## 2. 詩人戦争と*Histriomastix*

では最初に、詩人戦争と*Histriomastix*との関連について、見取り図を説明しておこう。詩人戦争と呼称される事象は、*Histriomastix*におけるあるキャラクターの造形と、銜学的な“neologism”（新造語句）に反発したBen Jonsonが、*Every Man Out of His Humour*の中で諷刺を用いてやり返し、それをきっかけにMarstonとJonsonとの間で諷刺合戦が展開され、さらにはJonsonがThomas Dekkerまで諷刺の標的にしたことから、Dekkerもこの戦争に参戦した、と一般的には記述されている。また、一連の諷刺の応酬に関わった戯曲としては、Marstonの*Jack Drum's Entertainment*と*What You Will*、Jonsonからは*Every Man Out of His Humour*、*Cynthia's Revels*および*Poetaster*、そしてDekkerによる*Satiromastix*のタイトルが挙げられることが多い。

議論のための第一ステップとして、ここで、詩人戦争勃発の証拠の痕跡と考えられている台詞を、*Every Man Out of His Humour*から確認しておきたい。

CLOVE Now, sir, whereas the ingenuity of the time and the soul's synderisis are but embryons in nature, added to the paunch of esquiline and the intervallum of the zodiac, besides, the ecliptic line being optic and not mental, but by the contemplative and theoric part thereof, doth demonstrate to us the vegetable circumference and the ventosity of the tropics, and whereas our intellectual or mincing capriole, according to the *Metaphysics*, as you may read in Plato's *Histriomastix* – you conceive me, sir?

ORANGE Oh, Lord, sir! (3.1.142-49, underlines mine)<sup>2</sup>

これは、気取り屋のCloveが友人のOrange相手に、もったいぶった語句を連

ねることで、若い洒落者たちに、これらのナンセンスな表現が学術的タームであるかのごとき印象を与えようとする場面である。Jonson が William Drummond に向かって、“he [=Jonson] had many quarrells with Marston beat him & took his Pistol from him, wrote his Poetaster on him” と自慢したエピソード自体は以前から知られていたが、<sup>3</sup> 19 世紀後半に Richard Simpson が各種の同定を行って以来、Jonson を怒らせたのが *Histrionmastix* であるとの見解が長い間支持されてきた。<sup>4</sup> しかし、近年になって Simpson 説の妥当性をめぐり賛否両論の議論が交わされ、現在に至っている。

Simpson 説に賛同する研究者たちの根拠は、上記引用に施した下線部の表現が、Marston の諷刺詩 *The Scourge of Villanie* や *Histrionmastix* においても確認できるということに尽きる。また、それを否定する研究者たちの反論も、基本的には文体論的アプローチに根差したものにすぎない。これには *Histrionmastix* を取り巻くデータが極めて限られているため、スタイル面からでしかアクセスできないという事情が関与しているが、文体論に基盤を置いた同定作業は確実性という面から見て限界を伴う作業と言わざるを得ない。

本論の立場は、下線部中の最後のフレーズ “Plato’s *Histrionmastix*” を根拠に、Jonson が指示するものは *Histrionmastix* であるという説に与するものである。その理由を 2 点述べておこう。先ず第一に、語尾に “-mastix” を伴う作品名は、Jonson がこの *Every Man Out of His Humour* で言及するもの以外、それ以前に 1 点も存在しなかったことが挙げられる。唯一の例外は、作品名ではないが、Marston が自身の諷刺詩の中で、自分自身を指し示すペルソナとして使用した “*Therionmastix*” (= the Scourge of the Beast) しか存在しない。

第二の理由は、該当戯曲のプロットに関わるものである。*Histrionmastix* には、1610 年に出版された唯一のクォート版に付された副題 “THE PLAYER whipt” (鞭打たれた役者・役者への鞭) が示すように、劇中に登場する、地方巡業中の成人劇団を示唆するような役者集団が追放される場面が設定されている。

HISTRION-MASTIX.

Or,

THE PLAYER

whipt.

Printed for T. H. THORP.  
1610.

Jonson が、この役者追放という現象に、プラトンが『国家』篇で記述する詩人追放論を重ねていることは明らかである。プラトンは、国家の守護者となり得る子供たちの、魂におけるエトスの初期教育のために、ミーメシスを排斥したのだが、Jonson の連想は正にここにリンクしていた訳である。しかしながら、初期近代イングランドにおける、西洋古典に精通した知識人を自負していた Jonson が、プラトンの原著名ではなく、わざわざ *Histriomastix* という「ひねり」を採用しているという事実こそ、Jonson が *Every Man Out of His Humour* で指示する戯曲が、*Histriomastix* に他ならないことを証明するものであると考えられるのである。

### 3. *Histriomastix* クオート版をめぐって

*Histriomastix* は、その作者、上演劇団、上演場所、創作上演時期をめぐって、研究者ごとに見解が相違する厄介な戯曲である（下記年表に代表的な見解を波線を付して 3 例記載しておく）。

#### John Marston の世紀転換期における創作活動（＋詩人戦争関連事象）

- 1598 *The Metamorphosis of Pygmalion's Image and Certain Satires* 出版
- 1598 *The Scourge of Villanie* 出版（1599 年に増補出版）
- 1598 *Histriomastix* (Christmas, Middle Temple, Finkelpearl & Gair 説)  
-99
- 1599 諷刺詩禁書令発布（6 月 1 日, Whitgift & Bancroft）
- 1599 Marston, Paul's と関わる（9 月, Gair 説）
- 1599 *The Scots Tragedy* (Jonson, Chettle, Dekker and Marston(?), Admiral's)
- 1599 ?????（9 月 28 日, Henslowe より £2 (40s) の手付け金, Admiral's)
- 1599 *Histriomastix* (Paul's(?), Harbage 説)
- 1599 *Every Man Out of His Humour*（9 月ごろ, Jonson, Chamberlain's）
- 1599 *Antonio and Mellida* 上演（10 月, Paul's 再活動後最初の舞台）
- 1600 *Jack Drum's Entertainment*（5 月ごろ, Paul's）
- 1600 *Antonio's Revenge* (Paul's)
- 1600 *Lust's Dominion* (with Day, Dekker and Haughton, Admiral's)
- 1601 *What You Will* (Paul's(?))
- 1601 *Cynthia's Revels*（5 月, Jonson, Chapel）

- 1601 *Poetaster* (6-7 月ごろ, Jonson, Chapel)  
1601 *Satiromastix* (Dekker with Marston?, Chamberlain's and Paul's)  
1601 *Histrionastix* (Christmas, Middle Temple (?), Wiggins 説)  
-02  
1605 *Eastward Ho* (Chapman with Jonson and Marston, Queen's Revels)

このセクションでは、*Histrionastix*の現在の研究状況を確認しておこう。すでに言及したように、*Histrionastix*に関して現代の我々が依拠できるテキストは、Thomas Thorpe が 1610 年に出版したクォート版しか存在しない。しかし、このクォート版には、1604 年から 5 年にかけて創作上演された *Eastward Ho* への明らかな言及が存在していて、創作初演の時期と印刷出版の時期との間に、何らかの手が加えられた形となっている。また、戯曲中に登場する商人や弁護士の名前に混乱が見られるなど、信頼性の点でも問題があり、テキストの分析に当たっては、オリジナルの姿が判明しないため、ある程度の限定を付けて作業を行う必要がある。

そこで最初に作者問題から見ておけば、ざっくりと要約する形になるが、Marston 説とミドル・テンプル関係者説とに二分される。だが、そもそもこの作者にしてからが、オリジナルの創作者なのか、やや古い戯曲の改訂者なのか、はたまた部分的に携わった共作者なのかについてさえ意見の一致を見ていない。現在のところ最も新しい見解を紹介しておけば、“attribution” という形ではあるが、Martin Wiggins は Marston 説を支持している。<sup>5</sup> また、プロットが有機的、シームレスに構成されていることから、単独の作者を想定する論文が優勢であるようにも見受けられる。本論ではこの作者問題に介入する準備はないが、後述するように、作者の同定如何に関わらず——ただし、仮に Marston であるならばより好都合な——議論を考えている。

さて次に、作者問題以上に面倒なのが、*Histrionastix* を誰がいつ上演したのか、という上演系統の問題である。これに関しては、ミドル・テンプルにおいて法学院関係者が上演をしたと考える立場と、Marston のプロデュースによってセント・ポール少年劇団が再開直後に舞台にかけたとする、二つの見解が提出されている。この問題の論点は、仮に Marston が作者だとすると、上記年表から判明する通り、1599 年の秋頃 Marston が極めて多忙になる、あるいは多忙すぎるということと、*Histrionastix* 上演に必要な役柄数が 100 を超え、ダブルリングを想定したとしても、通常の劇団ではマン・パワー的に対応不可能なと

ころ、とにある。

最初の論点、Marstonの多忙化については、ミドル・テンブルの幹部であった父親の斡旋によって法学院に籍を置いたMarstonが、法曹関係には端から関心を示さず、諷刺詩で衝撃的なデビューを飾ったものの、1599年の6月1日に、John Whitgift と Richard Bancroftによって発布された諷刺詩禁書令（いわゆる Bishops' Ban）の対象となり、焚書の憂き目に遭ったことと関係する。Marstonはここで諷刺詩から演劇へと方向を切り替えた訳だが、Whitgift等による諷刺詩の抑圧と、6月から10月ごろにかけてのMarstonの動向とについては、セント・ポール少年劇団の活動再開にからむファクター調査の見地から、非常に重要なポイントとなるため、改めて後ほど議論する。

#### 4. Why *Histrionastix* ?

以上のように、*Histrionastix* に関しては、解決されるべき課題が多数残存しているが、このセクションでは、創作上演時期の問題と絡めて、少年劇団の活動再開を考える上で、なぜ*Histrionastix* を取り上げることが重要であるのかについて考えてみる。

すでに言及したように、*Histrionastix* の創作上演時期の可能性にまつわる選択肢は多岐にわたっていた訳だが、突き詰めれば、この戯曲がセント・ポール少年劇団の再活動以前のものであるのか、あるいはそうではないのか、が問題となる。仮に*Histrionastix* が活動再開後に制作された作品だと判断した場合、上演媒体はもとより、作者も自動的に決まってくるからである。

本論の立場は、この問題点に関しては、少年劇団再開以前にミドル・テンブルで上演されたものではないか、というものである。先に触れた劇団のマン・パワーという根拠もさることながら、もう一つ重要な理由をここで述べておきたい。セント・ポール少年劇団の再オープン直後に、Marstonが提供した戯曲が、*Antonio and Mellida* ならびに *Jack Drum's Entertainment* であることは確実とされているのだが、この2作品には、*Histrionastix* には見られない、自作品を他の戯曲から差別化するような、演劇的自意識に富む記述を確認することができる。

先ず、*Antonio and Mellida* の序幕から見ておこう。

GALEAZZO Come sirs, come! The music will sound straight for

entrance. Are ye ready, are ye perfect?  
PIERO Faith, we can say our parts, but we are ignorant in what  
mould we must cast our actors.  
ALBERTO Whom do you personate?  
PIERO Piero, Duke of Venice.  
ALBERTO O, ho! Then thus frame your exterior shape  
To haughty form of elate majesty,  
As if you held the palsy-shaking head  
Of reeling Chance under your fortune's belt,  
In strictest vassalage. (Induction, 1-11)<sup>6</sup>

この序幕は総行数 148 行、引用箇所はその冒頭部 10 行ばかりにすぎないが、この序幕全体の特徴をよく表したものとなっている。マント状のものを羽織り、手に“parts”（抜き書きされた台詞のスクリプト）を持った人物が 8 名、舞台に登場する。彼等はおのおのの台詞は言えるものの、自分が演技すべきキャラクターの演技方や造形が分からないために相互に確認を行い、情報交換をするという内容になっている。また、この序幕の直後に、序詞役がプロローグを別に述べる構造となっているため、この序幕は独立性の高い配置となっている。*Antonio and Mellida* のレヴェルズ版の編者で、Marston に関して多くの業績を発表している W. Reavley Gair は、これら序幕、プロローグおよび第 1 幕の冒頭 100 行の機能について、“The effect of the Induction, the Prologue, and the first hundred lines of the first scene is to introduce a new company of actors to a new audience in a play by a novice dramatist. It has, moreover, already afforded an opportunity ... to display all the members of the acting company, and to allow Marston a chance to show his skill at innovating dramatic techniques” と述べている。<sup>7</sup> さらに Gair は、“*Antonio and Mellida* has a number of features suggesting that it was designed for the opening night of the newly revived Paul's company” とさえ指摘している。<sup>8</sup>

では次に、*Jack Drum's Entertainment* を見ておこう。

Yet if youle pardon his defects and ours,  
Heele give us passage, & you pleasing sceanes,  
And vowes not to torment your listning eares



With mouldy fopperies of stale Poetry,

Unpossible drie mustie Fictions:

(The Introduction, 21-25)<sup>9</sup>

この劇にも、ドラマ本体が開始される前に、“The Introduction”と名付けられた導入部が設けられ、少年役者が一人登場して口上を述べるのだが、その中で強調されることは「カビくさい、古くさい」演目を舞台にかけたりはしない、ということである。同じ系統の台詞は、劇中の人物たちのやり取りでも確認することができ、“they[=the Boyes] had good Playes, but they produce / Such mustie fopperies of antiquitie”（第5幕, p. 234）とのネガティブなコメントが付与されている。これは、（後ほどもう一度言及するが）少年劇団の活動再開時に、道徳劇風の戯曲がレパートリーとされたことと関係していて、Marstonがセント・ポール少年劇団に提供する戯曲は、そうした欠点を回避した、時代の流行に即応したものであることをアピールするための仕掛けであると考えてよいであろう。

ところが、その一方で*Histriomastix*には、こうした意識を窺わせる台詞を見出すことはできない。「役者に対する鞭」というタイトルが示すように、劇中には、“Sir Oliver Owlet’s Men”と名乗る一座の振る舞いや彼等の上演に関する劇評など、メタ・シアトリカルな台詞はそれなりに書き込まれてはいるのだが、イタリア貴族による“Most ugly lines and base-browne-paper-stuffe / Thus to abuse our heavenly poesie, / That sacred off-spring from the braine of Jove, / Thus to be mangled with prophane absurds, / Strangled and chok’t with lawlesse bastards words.”（第2幕, p. 264）だとか“Lame stuffe indeed the like was never heard.”（第2幕, p. 265）などのコメントがせいぜい目に付く程度で、*Antonio and Mellida*および*Jack Drum’s Entertainment*両作品で確認できた、1600年前後の演劇界での流行を踏まえた、自作品の新しさを強調するような差別化の戦略は、*Histriomastix*にはないと言ってよいであろう。そしてこの現象は、*Histriomastix*とMarstonが少年劇団再開後にプロデュースした2作品とを弁別する、重要な指標であると考えることができる。

*Antonio and Mellida*と*Jack Drum’s Entertainment*は、再始動し出した後の少年劇団が上演した戯曲であるから、活動再開を可能にしたファクターを探る本論の立場から言えば、再開直前の劇団の状況に関与していたMarstonと、そのMarstonが所属していた法学院でこの時期に制作されていた*Histriomastix*とが、どのようにクロスオーバーしていたのかを探ることが、重要になってくる訳



である。

## 5. *Histriomastix* とはどのような戯曲か

それでは、このセクションで、戯曲としての *Histriomastix* について説明を行い、1600 年前後の時期におけるその位置付けを確認しておく。

そこで先ず、プロットを紹介しておこう。この劇には道徳劇風の寓意的人物と通常のキャラクターが混在してアクションが展開するという、世紀転換期の作品としては正に「カビくさい」特徴を備えており、しかも6幕構成という異例の構造を有している。この6幕には、それぞれの幕を統治もしくは影響力を行使する支配者が設定されていて、順に列挙すれば、先ずPeace（平和）が、次にその娘Plenty（豊穡）が、第3幕になるとPride（高慢）が、そして第4幕ではEnvy（ねたみもしくは悪意）が、次の第5幕はWar（戦争）が支配し、最終第6幕ではPoverty（貧困）が君臨した後、大団円でPeaceとPlentyが復位し、さらにその後に登場した正義の女神Astraea（つまりElizabeth I）に玉座を譲り、女王の栄光を称えて幕となる。

*Histriomastix* は、これらの寓意的人物が発揮する影響力のもとに、アクションが展開してゆく。Peaceのもとでは、廷臣たちがリベラル・アーツを学ぶことを求められ、また商人たちは学問の大切さについて説教をされる。Peaceに替わって即位した新女王Plentyは、貧富の格差を是正し豊かな社会の建設を所望するものの、廷臣たちのみならず商人たちも学問をなおざりにし、祝宴や余興を志向し、この過程でSir Oliver Owlet's Men が導入されることになる。

第3幕になると、PrideがVaine-glory（虚栄）やHypocrisie（偽善）などを従えて君臨し、人々の心を野心や高慢・華美で満たす計画を述べる。この影響を受けて、貴族とその解雇された従者たちがいがみ合い、貴族や商人の妻たちが贅沢さを競い合い、また役者たちは公演料の安さに反発して、値上げを要求したりする。さらにこの流れのもと、次の第4幕では、Envyの支配下に置かれた人物たち、特に貴族と商人たちは、野心を全開にして階級間闘争の様相を呈する。

Warが君臨する第5幕では、貴族間の戦争と、明らかにJack StrawやJack Cadeの暴動を念頭に置いた、あるいはパロディ化した民衆の蜂起が描かれ、最終幕では、戦争で荒廃し疲弊した社会の中で、階級を問わずすべての人物が貧困と困窮を嘆き、平和を希求する。そして、すでに述べたように、平和と豊

穢、正義が回復される形で幕となる（なお、この第6幕で、一座の役者たちは、税金未納の廉で巡査から国外追放の処分を受ける）。

ところで、*Histrionastix*には、今述べたアクションに遍在し、劇中の様々な局面をつなぎ止めリンクする、コーラス的人物が存在する。それがChrisoganusで、彼は劇冒頭部ではPeaceの宮廷に籍を置く学者として、リベラル・アーツの先導役を果たすものの、やがて貴族たちの反知性主義の風潮の中、孤軍奮闘を強いられることになる。その後、Chrisoganusは役者集団との絡みで、詩人もしくは劇作家的機能を果たす場面もあるのだが、最終的には知恵と英知の重要性を説き、七大罪による魂の墮落を回避することを主張して、再び廷臣たちの精神的支柱の座に返り咲く。

*Histrionastix*のこのプロットから明らかなように、紛れもなくこの戯曲は道徳劇もしくはモラル・インターラード的であり、その主題が、中世のJohn GowerやGeoffrey Chaucerが盛んに取り上げ、演劇では16世紀中葉に導入された“estate satire”（階級諷刺）であることが理解できるであろう。

しかし、そのことをもってして、*Histrionastix*が完全に演劇興行の時流を踏み外した、異端児と即断することはできない。実は、この1600年前後の時期に、こうしたモラル・インターラード風の劇に対する需要が、二つの系統で存在していたことが判明している。一点目は、Roslyn Lander Knutsonが指摘するように、“diversification”つまり演目の多様化こそが観客への訴求力を生み出したということで、彼女は、海軍大臣一座が1595-6年に*Seven Days of the Week*という道徳劇でかなりの収益を上げ、さらに宮内大臣一座が1599-1600年に*Cloth Breeches and Velvet Hose*という階級諷刺劇をレパートリーにしていたことを報告している。<sup>10</sup>

もう一点は、何らかの事情で活動再開を急いでいた少年劇団が、レパートリー不足を補うために、この時期、モラル・インターラード的な戯曲をリサイクルもしくはリヴァイズして利用したという事情である。例えば、セント・ポール少年劇団は、*The Wisdom of Doctor Dodypoll* (1599) や *The Maid's Metamorphosis* (1600) を、セント・ポール少年劇団に続いて活動を再開させたチャペル・ロイアル少年劇団は、*The Contention between Liberty and Prodigality* (1601) を上演したことが知られており、このチャペル・ロイアル少年劇団に戯曲を提供していたJonsonは、

Oh, I had almost forgot it, too, they say the *umbræ* or ghosts of some three

or four plays departed a dozen years since have been seen walking on your stage here. Take heed, boy, if your house be haunted with such hobgoblins, 'twill fright away all your spectators quickly. (*Cynthia's Revels*, Praeludium, 154-57)

「この手の演目は観客の足を遠ざけてしまう」と警鐘を鳴らすほどであった。<sup>11</sup> 以上のように、一見したところ、古くさい特徴を備えた *Histrionastix* ではあるのだが、その実態はこうしたコンテクストに置いて評価する必要がある。

## 6. Marstonとセント・ポール少年劇団の接点を求めて

諷刺詩人として出発した Marston が劇作家へと転身した要因が、1599 年 6 月 1 日に発布された諷刺詩禁書令であったことはすでに指摘した通りだが、この禁書令を生み出した政治宗教的環境をここで確認しておこう。

16 世紀末のアングリカン・チャーチ体制を揺るがした重大な出来事の一つが、マーティン・マープレリト論争であったことは周知の事実だが、1588 年の 10 月に刊行された *The Epistle* (『書簡』) と題されたパンフレットを嚆矢とするこの論争において、マーティン・サイドのレトリックに対抗すべく、国教会はプロの文筆家を投入する。後にパトロンとなる、カンタベリー大主教 Whitgift に動員された Thomas Nashe もその一人であったが、マープレリト論争での応酬の過程で、Nashe は、Gabriel Harvey および Richard Harvey の Harvey 兄弟と敵対関係になり、このことが後の Harvey-Nashe 論争へと発展し、両者の争いは、マープレリト論争が終結した後も、一般的には 1597 年頃まで継続したとされている。

ところが、今回のこの 1599 年の禁書令において、Nashe と Harvey に関するあらゆるパンフレットの押収ならびに出版の禁止が、明記されていることを見逃すことはできない。彼等の論争は、基本的には個人間の誹謗や諷刺の応酬であったが、1595 年頃から興隆してきた諷刺的文化環境の中で、危険なニュアンスを帯び得るものと見なされたと考えられる。

そしてさらに留意すべきことは、Harvey-Nashe 論争自体が、もともとマープレリト論争のスピノフ的現象であり、そのマープレリト論争に不承不承動員された John Lyly が投入したと考えられる反マーティン劇の影響で、ややタイムラグを置いて、セント・ポール少年劇団が活動停止を余儀なくされた、と

いう点である。<sup>12</sup> Marstonが劇作家への転身を強いられ、その結果、少年劇団の再始動に着目するようになった契機であるこの禁止令は、同時に、その少年劇団の活動を停止に追いやったマープレリト論争と、政治的宗教的次元で地続きあるいは通底していた訳である。それにもかかわらず、結果的には、少年劇団は活動を再開することができた。それを可能ならしめた要因は何なのか、その理由は何であるのか——繰り返しになるが、これを探求することが本研究の目的となる。

さて、先ほど言及した 1590 年代半ばにおける諷刺詩の擡頭だが、その中心にいたのがケンブリッジのフェローであった Joseph Hall であり、それに追隨したグレイズ・インの Everard Guilpin、ミドル・テンブルの John Davis や Marston 等の辛辣な諷刺詩の刊行と相俟って、16 世紀末を諷刺文化の色合いに染め上げてゆく。この Guilpin は Marston の従兄弟でもあり、Marston の処女諷刺詩と同じ 1598 年に、*Skialetheia, or a Shadow of Truth* を刊行するが、興味深いのは、そこに収められたエピグラムの中で“Chrisoganus”という名前を使用して、Jonson を諷刺したことであった。

本論の冒頭部で、Jonson が反発を示したものが、*Histrionomastix* におけるあるキャラクターの造形と銜学的な“neologism”であると述べたが、実は、このキャラクターこそ Chrisoganus だったのである。先のプロット紹介でも指摘したように、学者であり詩人でもあったこの Chrisoganus は、ヒューマニティーズの擁護者でもあり、むしろポジティブな表象がなされている訳なのだが、Jonson が反感を覚えたのは、自身と等身大の学者貧乏的な描写に加えて、Guilpin の諷刺も関与していたことを想定しておく必要がある。その証拠に、後に *Poetaster* の中で、Chrisoganus を当てこすった“Crispinus”という名前で登場させられた Marston は、Jonson のペルソナである Horace から薬を飲まされ、大量の語句を嘔吐させられる、という復讐を受けるからである。

今サーヴェイしたような諷刺文化の流行とその変化という環境の中で、Marston は、上記年表にあるように、1599 年 6 月以降 10 月にかけて、少年劇団のみならず Philip Henslowe ととも接触し、<sup>13</sup> 演劇界へ打って出る複数のルートを確認しようとしていたと考えられる。Henslowe から手付け金を受け取っていた Marston は、すでに成人劇団のために実働を行っていたと思われるが、その一方で、Marston のもう一方の接触相手であった少年劇団側には、どのような事情があったのであろうか。

セント・ポール少年劇団では、1584 年以来、Thomas Gyles が聖歌隊のマス

ターと劇場のマネージャーとを長らく兼任していた（ただし、劇団の活動停止に伴い、劇場のマネージャー職は 1591 年までであったとされている）。本論で問題としている 1599 年の時点で、Gyles は健康をかなり傷害していたため、本人存命中にもかかわらず、1599 年 5 月の段階で Edward Pearce が新たなマスターとして迎えられ、同じ年に Marston が劇場のマネージャーに就任している。これらの人事異動が示唆するものは、結果的には、少年劇団の活動再開に向けた準備作業と体制整備ということになるであろう。

さらにもう一点、1599 年後半期におけるセント・ポール少年劇団の活動状況を伝える、史的資料を紹介しておこう。それは、1599 年 11 月 13 日以前に、Rowland Whyte が Sir Robert Sidney に行った、“My Lord Derby hath put up the plays of the Children in Paul’s” との報告である。<sup>14</sup> この Derby 卿とは、法学院（リンカーンズ・イン）にも籍を置き、自らも戯曲を創作し、劇団のパトロンにもなっていたと言われる、第 6 代 Derby 伯 William Stanley のことであるが、今引用した箇所の続きに “to his great pains and charge” という興味深いフレーズが続いている。解釈に微妙なところはあるが、おそらく Derby 伯は資金面での援助を行っていたのであろう。Derby 伯の援助が活動再開前なのか後なのかは断定できないが、この時期に少年劇団が、政治的権威と金銭面でのサポートを受けていたことは、本論の立場から言えば重要な事象と思われる。

以上、ここまで、1599 年の Marston とセント・ポール少年劇団の動向を、*Histriomastix* の分析と絡めながら検証してきた。少年劇団の活動再開を可能ならしめた直接的な理由については、今後も探求を継続する必要があるが、最後に今回の調査を通じて収集したデータをまとめておく。

- (1) セント・ポール少年劇団は、人事体制を一新することで、活動再開を視野に入れた対応を進めていた。
- (2) 再活動を急いでいた証拠と考えてよい、インターロード風の演目を準備していた。
- (3) 同時期の法学院の余興においても、*Histriomastix* という同系統の戯曲が上演された。
- (4) 戯曲制作へ転身を図ろうとしていた Marston は、このような情報を考慮しながら、複数のルートと接触を試みていた。

## 注

- \* 本論は、平成 29～32 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））「エリザベス朝王朝交替期における諷刺的文化環境の出現と演劇興行へのインパクト」（課題番号 17K02490）の成果の一部である。
- 1 Michael Shapiro, *Children of the Revels: The Boy Companies of Shakespeare's Time and Their Plays* (New York: Columbia UP, 1967) 19.
  - 2 *Every Man Out of His Humour* および *Cynthia's Revels* からの引用は、David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson, eds., *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson* (Cambridge: Cambridge UP, 2012), vol.1 に拠る。
  - 3 C. H. Herford and Percy Simpson, eds., *Ben Jonson*, vol. 1 (Oxford: Clarendon P, 1925) 140.
  - 4 Richard Simpson, *The School of Shakspeare*, vol. 2 (London: Chatto & Windus, 1878) 4-8.
  - 5 Martin Wiggins and Catherine Richardson, *British Drama 1533-1642: A Catalogue*, vol. 4 (Oxford: Oxford UP, 2014) 356.
  - 6 *Antonio and Mellida* からの引用は、W. Reavley Gair, ed., *Antonio and Mellida* (Manchester: Manchester UP, 2004) に拠る。
  - 7 Gair, Introduction, 45.
  - 8 Gair, Introduction, 24.
  - 9 *Jack Drum's Entertainment* および *Histrionastix* からの引用は、H. Harvey Wood, ed., *The Plays of John Marston*, vol. 3 (Edinburgh: Oliver and Boyd, 1939) に拠る。なお、このエディションには、戯曲本体に行数表示が施されていないため、幕と掲載ページ数を記載する。
  - 10 Roslyn Lander Knutson, *Playing Companies and Commerce in Shakespeare's Time* (Cambridge: Cambridge UP, 2001) 101.
  - 11 James P. Bednarz, "Writing and Revenge: John Marston's 'Histrionastix'," *Comparative Drama* 36 (2002): 41-42.
  - 12 このあたりの前後関係を年表化すれば、以下のようになる。  
**セント・ポール少年劇団活動停止時期関連事象**  
1588 年 7 月 アルマダ海戦開始  
1588 年 10 月 Martin, *The Epistle* 刊行、マープレリト論争始まる  
1589 年 夏頃 反マーティン劇上演  
1589 年 7 月 Martin, *Martin Junior* 刊行  
1589 年 10 月 前半 Lyly, *Pap with an Hatchet* 刊行  
1589 年 11 月 5 日 Harvey, *An Advertisement for Pap-Hatchet and Martin Mar-prelate* 刊行  
1589 年 11 月 12 日 検閲強化に関する枢密院の記録  
1590 年 1 月 6 日 Lyly, *Midas* の御前上演  
1590 年 1 月頃 Nashe, *An Almond for a Parrot* 執筆  
この間 セント・ポール少年劇団の活動停止  
1591 年 10 月 4 日 *Endymion* および *Midas* の書籍出版業組合への登記
  - 13 W. W. Greg, ed., *Henslowe's Diary*, part 1 (London: A. H. Bullen, 1904) 112 に

“Mr. Maxton the new poet” との記述が存在する。

14 Gair, Introduction, 24.

## 参考文献

- Appleton, Elizabeth. *An Anatomy of the Marprelate Controversy 1588-1596: Retracing Shakespeare's Identity and That of Martin Marprelate*. Lewiston: Edwin Mellen P, 2001.
- Bednarz, James P. *Shakespeare & the Poets' War*. New York: Columbia UP, 2001.
- . “Writing and Revenge: John Marston's ‘Histriomastix.’” *Comparative Drama* 36 (2002): 21-51.
- Caputi, Anthony. *John Marston, Satirist*. Ithaca, NY: Cornell UP, 1961.
- Chambers, E. K. *The Elizabethan Stage*. 4 vols. Oxford: Clarendon P, 1951.
- Dutton, Richard. *Mastering the Revels: The Regulation and Censorship of English Renaissance Drama*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 1991.
- Finkelpearl, Philip J. “John Marston's *Histrio-Mastix* as an Inns of Court Play: a Hypothesis.” *Huntington Library Quarterly* 29 (1966): 223-34.
- . *John Marston of the Middle Temple*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1969.
- Gair, W. Reavley. *The Children of Paul's: The Story of a Theatre Company, 1553-1608*. Cambridge: Cambridge UP, 1982.
- Greg, W. W., ed. *Henslowe's Diary*. 2 parts. London: A. H. Bullen, 1904-8.
- Harbage, Alfred. *Annals of English Drama 975-1700*. Rev. S. Schoenbaum. London: Methuen, 1964.
- Jonson, Ben. *Ben Jonson*. 11 vols. Ed. C. H. Herford, Percy Simpson, and Evelyn Simpson. Oxford: Clarendon P, 1925-52.
- . *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*. 7 vols. Ed. David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson. Cambridge: Cambridge UP, 2012.
- Knutson, Roslyn Lander. *Playing Companies and Commerce in Shakespeare's Time*. Cambridge: Cambridge UP, 2001.
- Marston, John. *Antonio and Mellida*. Ed. W. Reavley Gair. Manchester: Manchester UP, 2004.
- Scragg, Leah. “Angling for Answers: Looking for Lyly in the 1590s.” *The Review of English Studies* 67 (2016): 237-49.
- Shapiro, Michael. *Children of the Revels: The Boy Companies of Shakespeare's Time and Their Plays*. New York: Columbia UP, 1967.
- Simpson, Richard, ed. *The School of Shakspeare*. 2 vols. London: Chatto & Windus, 1878.
- Wharton, T. F., ed. *The Drama of John Marston: Critical Re-visions*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Wiggins, Martin and Catherine Richardson. *British Drama 1533-1642: A Catalogue*. 7 vols. Oxford: Oxford UP, 2012-6.
- Wood, H. Harvey, ed. *The Plays of John Marston*. 3 vols. Edinburgh: Oliver and Boyd, 1934-9.



小野良子. 『マーストンの諷刺家たち W. K. からフォーンまで』 (東京: 近代文芸社, 1998).

佐野隆弥. 「John Lylyの後期喜劇に関わる政治的環境と少年劇団——*Midas* (1589) を事例として」. 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究』第71巻 (2017年). pp. 89-106.